氏　　名　青井哲人（あおい あきひと）
学位(専攻分野)　博　士　(工　学)
学位記番号　論工博第3499号
学位授与の日付　平成12年3月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
学位論文題目　神社造営よりみた日本植民地の環境変容に関する研究
——台湾・朝鮮を事例として——

論文調査委員　(主査)教授 髙橋康夫　教授 岡崎甚幸　教授 外山　義

論文内容の要旨

本論文は，日本植民地期を含む近代戦前期の台湾・朝鮮における神社造営ならびに在来信仰の再編成に注目することにより，日本の関与した海外地域の都市空間や山林環境の変容過程を社会的・技術的・制度的側面から多角的に解明したものであり，序章，本文7章，結章から成る。

序章では都市計画史，近代建築史等の先行研究の問題点を指摘し，日本植民地の環境変容史研究にあたり神社に着目する意義を明示している。

第1章は次章以降の事例検討に先立つ総説の位置づけにある。日本国内，海外地域全体，そして台湾・朝鮮の順に，主に神社制度確立前・後および改革期の三期に分け，神社境内関係の政策および神社造営の概況を整理している。

第2章では開港期朝鮮の日本人居留地における神社境内の特質と，日韓併合後の朝鮮総督府の神社政策の下での境内の管理，再編成の実態を明確にする。娯楽遊園地・景勝地としての公園地と境内地の一体的開発は居留民社会の自足的な共同施設の整備であると同時に日本の領土的利権拡張の一環であり，総督府の神社政策は居留民奉斎期の境内の実態を追認する消極的なものであった。

第3章では日本植民地初期の台北における台湾神社の国家的造営事業を，鎮座地選定および用地取得を中心に検討している。植民地初期の台北の都市建設は清代官街の置かれた旧台北城内に限定されていたとの従来の定説に対し，市街地より離れた丘陵地における神社造営が，旧城内における植民地政権の官街地区の設定および市区改正事業と不可分の関係にあったことを指摘している。

第4章では李朝の都城・ソウルにおける朝鮮神宮の鎮座地選定の経緯および候補地評価の特質について論じる。開港期ソウルにおける日本人勢力の伸張過程の顕彰という意図を反映した第一次選定に対し，伊東忠太を招聘しての第二次選定が都市全体の構造的改編を前提として景観・眺望や官街地区との空間的対応を重視するものであったことを指摘し，さらに植民地首位都市の持つ新旧祭祀秩序や中央・地方の二重性について神社の社会的側面から考察している。

第5章では台湾神社の境内が1901年の創建から植民地期を通じて変容する過程を主に時代毎の社会的要求の反映という観点から明らかにする。周辺民有地の買収，風致保全と参道整備，都市公園としての神苑整備を経て大正期に概ね完成された創建境内は，1939年以降の内務省技師を指導者とする社殿新築と飛躍的な神苑拡張において戦時総動員体制を背景とした境内計画へ転換した。

第6章では李朝時代に禁山であったソウルの南山が，漢城開市以後，互いに性格の異なる複数の神社境内の造営ならびに公園地の整備保全により変容していく過程を明らかにし，神社規則整備と戦時体制への移行に画期を見出している。各神社の境内がその社会的支持者の占有空間に物理的・象徴的に結びつけられる特質を持っていたこと，境内環境の特質が神社の社会的・技術的・制度的基盤とその変転を顕著に反映するものであったことを指摘している。

第7章では，戦中期の台湾における在来寺廟の統廃合運動の方針・手続・結果などの実態を，地方都市新竹を事例に明らかにする。市区改正による城壁都市の改編過程を踏まえ，寺廟整理運動の主目的のひとつが市街地内の枢要箇所に散在する

都市計画の障害としての寺廟の除去にあったことを指摘し，宗教政策と都市政策との関連を示唆している。

結章では以上の論点をまとめ，神社境内に注目することによって日本植民地の都市空間構造の形成，山林環境の変容といった問題にどのような知見と示唆が得られるかを論じるとともに，今後の課題を提示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は，日本植民地期を含む近代戦前期の台湾・朝鮮における神社造営ならびに在来信仰の再編成に注目することにより，日本の関与した海外地域の都市空間や山林環境の変容過程を社会的・技術的・制度的側面から多角的に解明したものであり，得られた主な成果は以下のとおりである。

1．日本植民地の首位都市における植民地総鎮守の鎮座地選定問題の検討により，神社の創建が植民地政権の官街地区の設定および市区改正事業と不可分の相補的関係にあったことを明らかにした。

2．海外神社の諸類型についてその境内立地条件を検討することにより，神社境内がその社会的支持者の占有空間に物理的・象徴的に結びつけられる特質を有していたことを指摘した。この観点から新旧祭祀秩序の二重性，首位都市の複合性といった日本植民地の都市構造の特質を明らかにした。

3．神社の社会的・技術的・制度的基盤がその境内環境の特質に顕著に反映されることを明らかにし，神社規則整備と戦時体制確立に画期を見出した。

4．台湾における寺廟整理運動が，市区改正により寸断され腐朽損壊していた市街地内の無数の小規模寺廟の除去を主目的のひとつとするものであったことを指摘し，宗教政策と都市政策との関連を示唆した。

以上を要するに，本論文は日本植民地における都市空間および山林環境の変容過程について，神社の鎮座地選定や境内環境の形成・変容というユニークな視点から解明し，数多くの知見を提示したものであり，学術上，実際上に寄与するところが少なくない。よって本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成12年1月12日，論文内容とそれに関連した事項について諮問を行った結果，合格と認めた。